

# 曠野

小川未明

青空文庫



野原のほらの中に一本ほんの松まつの木きが立たつていました。そのほかには目めにとまるような木きはなかつたのです。

「どうして、こんなところに、ひとりぼっちでいるようになったのか。」

木きは自分じぶんの運命うんめいを考かんがえましたけれど、わかりませんでした。そして、そんなことかんがを考かんがえることの、畢ひつきよう竟ひつきようむだだということを知しったのです。

「ただ、自分じぶんは大きおおくなつて、強つよく生きなければならぬ。」と思おもいました。

見み上げると、頭あたまの上うへをおもしろそうに、白しろくも雲もがゆるゆるとして流ながれてゆきました。

また、あるときは美しい小鳥ことりたちが、おもしろそうに話はなしをしながら飛とんでゆきました。

しかし、雲くもも小鳥ことりたちも、下したに立たつている木きを見みつけませんでした。

「小さちいくて、わからないのだな。」

木きは、ため息いきをついて叫さけんだほど、その存そんざい在ざいを認みとめられなかつたのです。

早はやく大おおきくなるうと木きは思おもいました。認みとめられたいばかりでなしに、地ち平へい線せんの遠えん方ほうを見みたかつたからです。一年ねんはたち、また一年ねんはたつというふうに過すぎてゆきました。そして、この松まつの木きが、すこしばかり根ねもとの地ちの上うへに、自分じぶんの小枝こえだの影かげが造つくられるほどに

なつたとき、その存在を認めてくれたのは、空をゆく雲でもなければまた小鳥たちでもありませんでした。それは、意地悪い風だったのです。伸びればますます強く荒く風はあたりました。

かえりみると、この木が、野原で大きくなつた歴史は、まったく風との戦いであつたといえるであります。木はけつしてこのことを忘れません。ある年、台風の襲つたとき、危うく根こぎになろうとしたのを、あくまで大地にしがみついたため、片枝を折られてしまいました。そして、醜い形となつたが、より強く生きるといふ決心は、それ以来起こつたのであります。いまは、もはや、どんなに大きな風が吹いても倒れはしないという自信がもてるようになりました。

「野原の一本松。」

空をゆく雲や、頭の上を飛ぶ小鳥たちが、それを認めただけでいい。ここを通る百姓もそういつて呼べば、村の子供たちもみんな知つていたのであります。

木は、こうして大きくなりました。しかし頭を上げて、地平線を望みただけで、あちらに山の頂と、黒い森と、ぼつりぼつり人家を見るだけで、けつして、そのはてを見るこ

とはできませんでした。また、青い空は、ますます高く、白い雲は、はるかに上を飛んでいるのであって、けつして、自分の頭のうえをすぎるときに、歩みをとめて、話しかけてくれるようなことはなかつたのです。

ただ、小鳥だけが、まれにきて枝にとまって翼を休めました。中でも渡り鳥は、旅の鳥でいろいろの話を知っていました。街の話もしてくれば、港の話もしてくれました。もつときけばなんでも教えてくれるのであつたが、松の木は、自らは経験のないことで、ただ渡り鳥のする話をきいて、世の中の広いということを悟るだけです。

「なぜ、私は、あなたのような鳥に生まれてこなかつたんでしょう。」と、松の木がいいますと、

「そんなことをうらやんではなりません。あなたは、これから百年、二百年と生きられるからです。もつと、いろいろのことを見たり、聞いたりなさるでしょう。私たちは、明日もわからぬ命です。なにが幸福か、不幸かということは、神さまだけにしかわかるものでありません。」と、渡り鳥はいいました。

「もし、またこの近傍をお通りのときは、ぜひここへきて休んでください。そして、おもしろい話をきかしてください。」

「きつと、まいりますよ。」

そういつて、渡り鳥は去つたのでした。こういうようなことが、これまでに何度あつたでしょう。二度と同じ渡り鳥で、たずねてくれたものはなかつたのです。

「あの赤い小鳥は、どうしてももうそつきとは思えなかつたが、身の上が変わりがあつたのでなからうか。」と、松の木は、考えるのでありました。

八月の赫灼たる太陽の下で、松の木は、この曠野の王者のごとく、ひとりそびえていました。

ある日のこと、一人の旅人が、野中の細道を歩いてきました。その日は、ことのほか暑い日でした。旅人は野に立つている松の木を見ますと、思わず立ち止まりました。

「なんだか、見覚えのあるような松の木だな。」

彼は、子供の時分、村はずれの原っぱに立っていた、そして、その下でよく遊んだ松の木を思い出したのでした。

「よく似た木もあつたものだ。やはり、片方の枝が折れていたつけが。」  
村の松の木の片方の枝は、冬、大雪が降つたときに折れたものでした。旅人は、

なつかしように、ひじようにそれとよく姿の似ている、松の木の下にきて休みました。木の影は、こうして慕い寄った旅人をいこわせるには十分でありました。目の前には、いろいろの雑草の花が、はげしい日光を浴びながら咲いて、ちようや、はちが飛び集まっているのがながめられましたけれど、ここだけは、まったく日が陰って、広い野を越えて吹いてくる風は、汗の引き込むほど涼しかったのでした。

「そうだ。遠くへ遊びにいつても、帰りに、あの木の頭が見えると安心したものだ。」  
 旅人は、子供の時分、釣りにいつて、疲れた足を引きずりながら帰ったとき、また学校の帰りにけんかをして、先方はおおぜいだったとき、そんなときでさえ、あちらに、親しい松の木が見えると、もう家に着いたような気がして、急に勇気が百倍したことなどを思い出したのでした。そして、しばらく彼は、遠い昔の空想にふけていましたが、あまり涼しいので、いい気持ちになって、そのまま木の根をまくらにして横になったのであります。

海のように、青い、青い空を、旅人はぼんやりと仰向けになつてながめていました。小さな白い雲、ややそれよりも大きい雲、ほんとうに大きな白い雲、いくつかの雲が鬼ご

つこでもしているように、追いつ、追われつしていました。

旅人は、このとき、忘れていた幼友だちの名まえと、顔つきをはつきりと思い出したのでした。そればかりでなく、自分もその仲間にはいつて、いっしよに走りつこをしている姿を目に見たのであります。

「みんな、あの時分の友だちはどうしたろうな。」

そのうちに、いっしakaiびきをかいて、ぐうぐうと眠つてしまいました。

松の木は、旅人のひとりごとをきいて、自分とよく似た木が、この地上のどこかに存在していることを知ったのです。それは、たがいに相見ることとはなくとも兄弟でなければならぬ。松の木は、はじめて不思議な力を感じました。もう、これからおれは、ひとりぼっちと歎くまいと思いました。

「力強く風に向かって戦おう。そして、慕い寄るものを慰めよう。」

これは曠野の王者として、まさに貴い考えでありました。

このときです。つばめは、しきりに鳴きました。あらしのくるのを知らしたのでした。日の光はかげつて、雑草の花の上は暗くなりました。ちようや、はちは、はやくも、どこかへ姿を隠してしまいました。



はげしく呼ぶ松風の声で、旅人は、目をさまして驚きました。

「ああお蔭で、気持ちよく眠った。こんどここを通るときまで無事でいてくれよ。」と、

彼は、松の木をなでたのであります。

疲れを回復した旅人は、新しい元気に勇んで、街をさして急ぎました。

あとから、雷の音が追いかけるようにきこえたのです。ふり向くと、もはや野原のかなたは、うず巻く黒雲のうちに包まれていました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「民政」

1933（昭和8）年8月

※表題は底本では、「曠野《こうや》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔<sup>あびす</sup>

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 曠野

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>